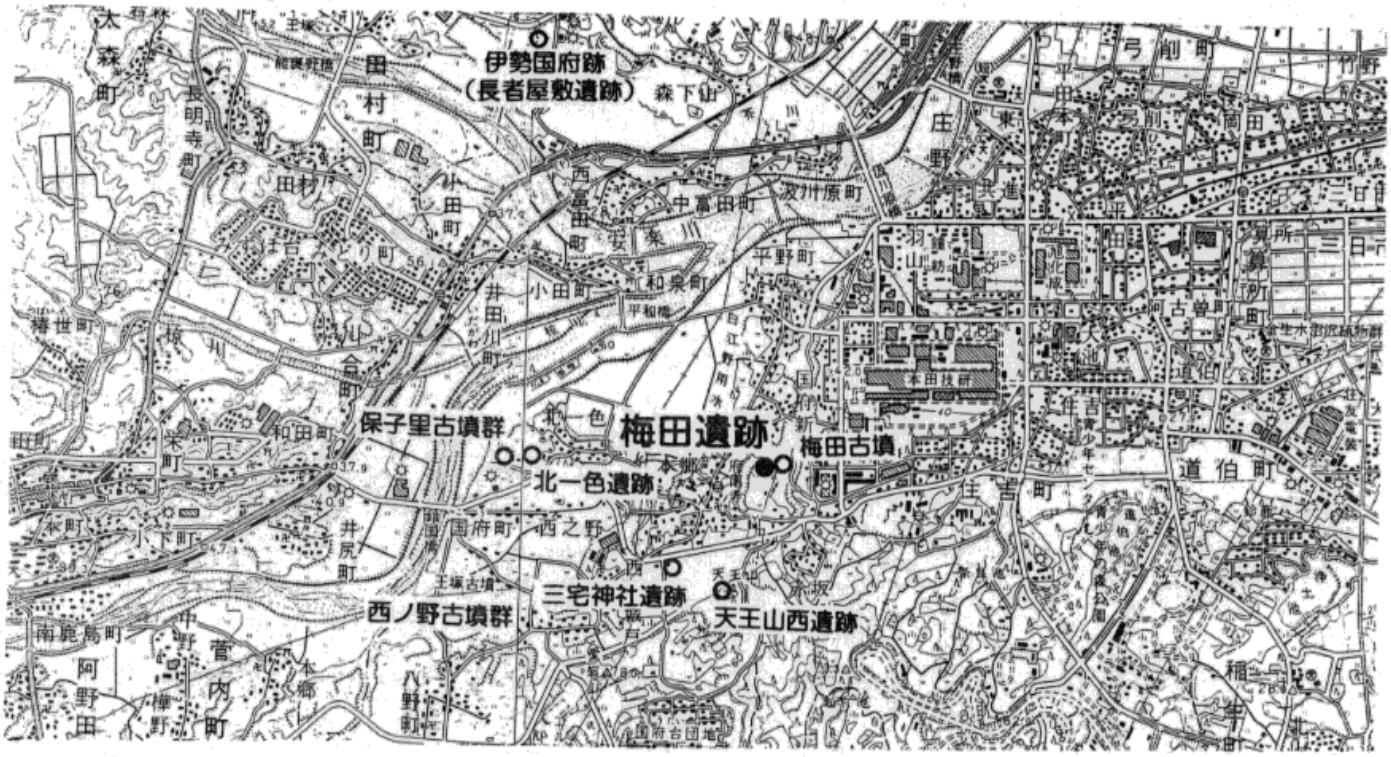
現地説明会資料

平成12年11月25日（土）

14：00～

うめだいせき

梅田遺跡



周辺の遺跡

所在地	鈴鹿市国府町字梅田地内
調査目的	基盤整備促進事業（担い手育成型） 国府南部地区に伴う埋蔵文化財の記録保存
調査期間	平成12年4月17日～12月25日（予定）
調査面積	4270㎡
調査主体	鈴鹿市教育委員会

はじめに

国府町付近は遺跡の宝庫で、縄文時代では北一色遺跡が、古墳時代では国史跡王塚古墳を含む西ノ野古墳群や保子里古墳群など多数の古墳があります。また古代には「国府」という地名が残っているように、伊勢国府（現在でいえば県庁にあたる）がこの地に所在していたと考えられています。

梅田遺跡は鈴鹿川中流の舌状にのびた低位段丘上に位置しています。当遺跡は故藤岡謙二郎氏が想定した方八町の国府域からやや東に離れた場所に位置しています。

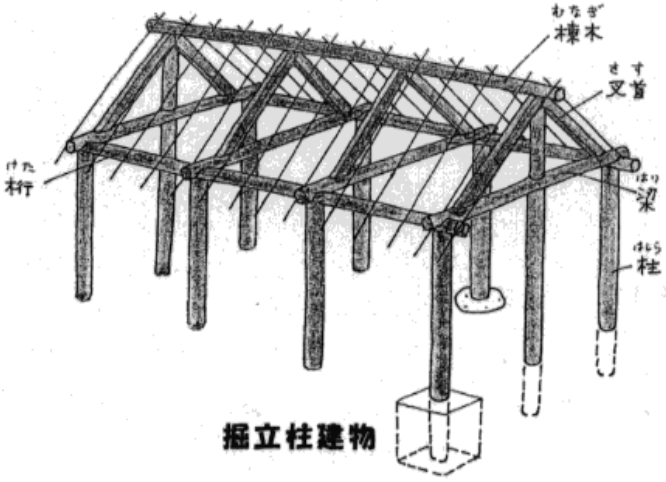
この周辺での発掘調査として平成２年には梅田古墳の調査が行われ円筒埴輪片や須恵器が出土しました。今回の調査は国府南部ほ場整備に関わる発掘調査で、昨年度の天王山西遺跡・三宅神社遺跡に引き続いて行ったものです。

調査成果

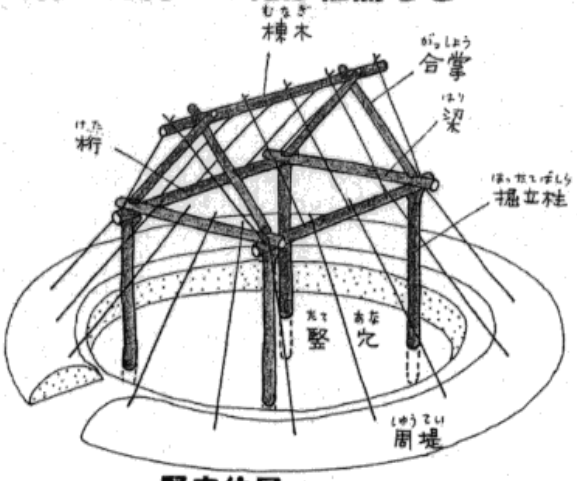
今回の調査で奈良時代末～平安時代初期（８世紀末～９世紀前半）の集落跡と鎌倉時代（12～13世紀）の集落跡が確認されました。調査区の東側には奈良時代末～平安時代の建物跡が、西側には鎌倉時代の建物跡が並んでおり、それぞれはっきりと分かれた形で発見されました。

《奈良時代末～平安時代初期》

奈良時代末～平安時代初期の建物跡として掘立柱建物跡が6棟、竪穴住居跡が2棟発見されました。掘立柱建物跡SB04・SB05・SB06・SB12は柱筋をそ



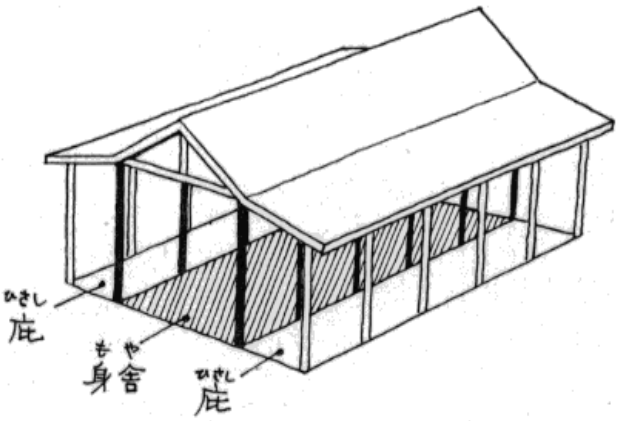
掘立柱建物



竪穴住居

ろえて建てられており、規格的に建物が配置されていたことが分かりました。この中で最も大きいものはSB05で、2間×4間の身舎(もや)に庇(ひさし)がつく構造となっており、広さは約80㎡(約24坪)あります。竪穴住居跡は2棟確認されましたが、どちらもかまどを伴っています。

SB06とSB07が重複していることとSB05は規模を縮小して建て替えられた痕跡が確認されていることなどから奈良～平安時代の中で少なくとも二時期あったと考えられます。



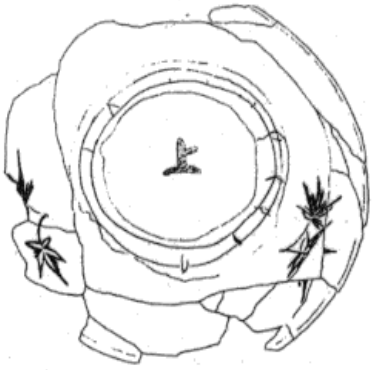
庇付建物

《鎌倉時代》

鎌倉時代の建物跡としては、現在のところ掘立柱建物跡が6棟確認されています。この中で最大のものがSB03とSB09で、5間×5間(柱間210cm)の構造で広さ約112㎡(約34坪)と非常に大きな規模を持っています。

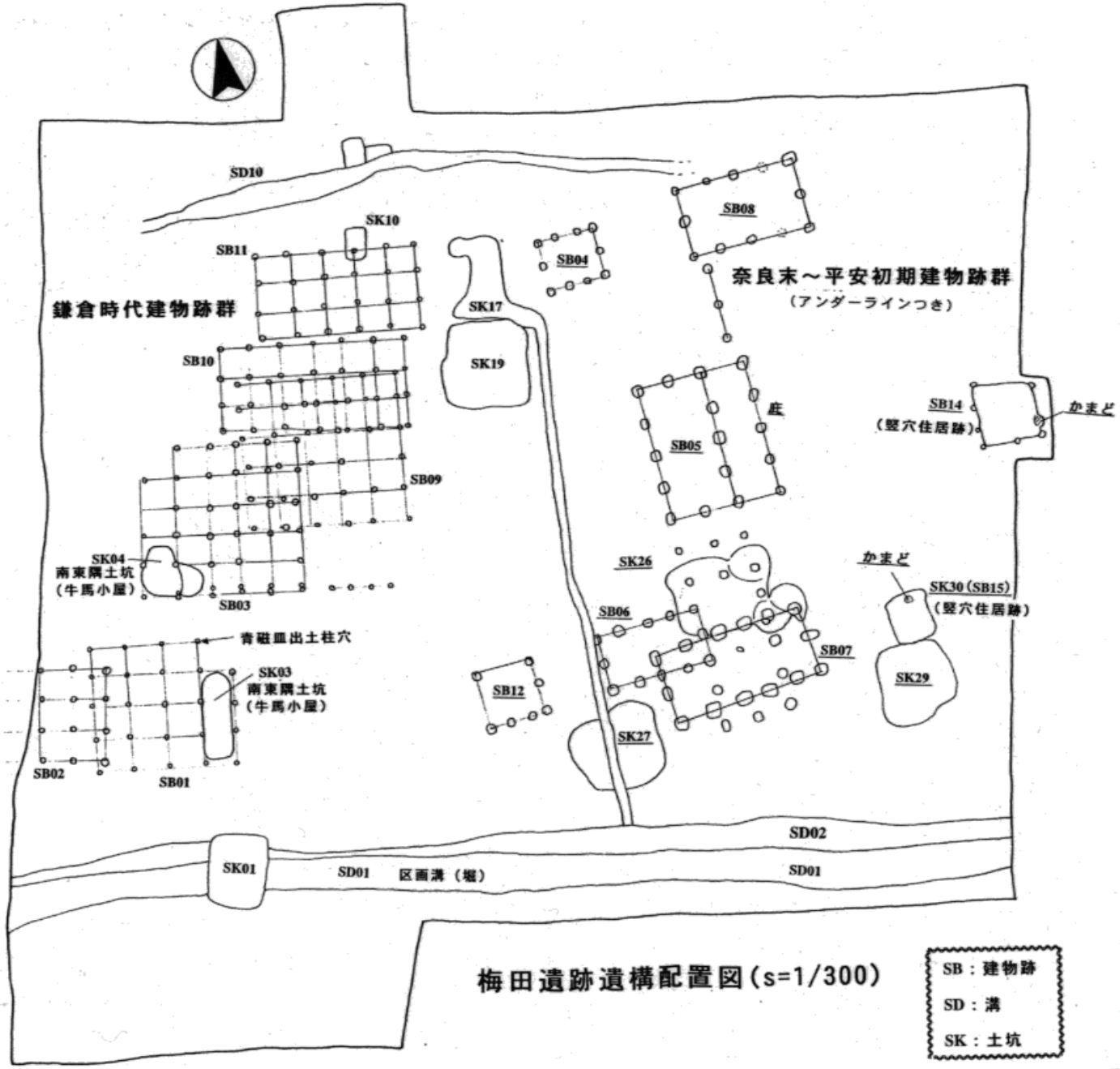
SB01やSB03では、建物の南側に土坑(どこう)が伴っています(SK03・SK04)。この土坑は一般的に建物の南東側に伴う場合が多いため「南東隅土坑(なんとうすみどこう)」と呼ばれており、馬小屋あるいは牛小屋の跡であったとも考えられています。

SB01の北東隅の柱穴から青磁(せいじ)皿が発見されました。北東は鬼門に当たるため、魔除けの意味をこめて意図的に埋められたものと想像されます。


紅葉の描かれた山茶碗

調査区南側に鎌倉時代の溝SD01が東西に走っています。この溝は集落の南側を区画する堀(区画溝)の役割をしていたと考えられます。

遺物は山茶碗(やまちゃわん)・常滑焼甕(とこなめやきかめ)・土師器(はじき)などが非常に多く出土しました。山茶碗の中には墨書で「上」「里(?)」などの文字が書



梅田遺跡遺構配置図（s=1/300）

SB：建物跡
SD：溝
SK：土坑

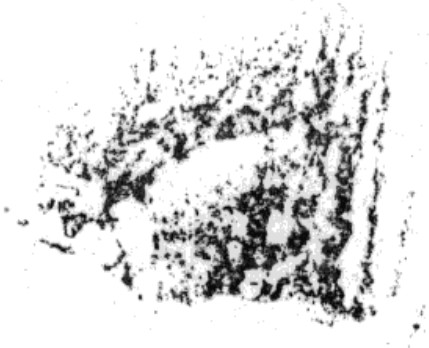
かれたものや、もみじの絵が描かれたものなどがあります。それ以外では青磁(せいじ)や白磁(はくじ)など中国（南宋(なんそう)）からの輸入品が多いことも注目されます。

まとめ

平安時代初め頃（９世紀前半）、それまで広瀬町にあった伊勢国府（長者屋敷遺跡(ちょうじゃやしきいせき)）が廃絶し、国府町の地に移転してきたと考えられています。梅田遺跡に集落が営まれ始めた時期とほぼ同じ頃です。そして、規格的に建物を配置し、しかも同じ場所での建て替えが認められること、瓦（文字瓦を含む）が出土したことなどから、ある程度のクラスの人達の集落跡と考えられます。国府に関連する人達の住まいだったのでしょうか。

その後10～11世紀の遺物はほとんど見つかっておらず、この時期に該当する建物跡はなかったと考えられます。再び集落が築かれたのは鎌倉時代（12～13世紀）頃です。当遺跡の鎌倉時代の建物跡は当時としては非常に大きな建物で、しかも青磁・白磁など中国からの輸入品を手に入れることができた人達がいた、ということからかなりの有力者の集落であったと考えられます。

文字瓦

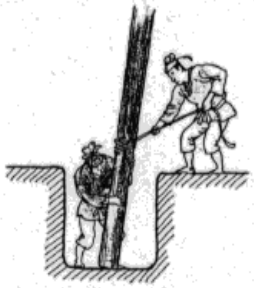


梅田遺跡出土

長者屋敷遺跡採集

キーワード

国府（こくふ）・・・古代、国ごとに置かれた地方の役所。都から国司（役人）が派遣され、一般行政、軍事、裁判などが行われた。奈良時代頃に全国各地に置かれたが、平安時代中頃以降には廃れていったと考えられている。



掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）・・・平地に穴（掘形）を掘り、そこに柱を立てて建てた建物のこと。

竪穴住居（たてあなじゅうきょ）・・・地面に穴を掘って、内部を土間床にし、屋根をかけた建物のこと。

文字瓦（もじがわら）・・・文字が押印された瓦のこと。広瀬町の長者屋敷遺跡から「宿」「人」「上」等の文字が押印されたものが約２００点出土しています。

山茶碗（やまぢゃわん）・・・尾張・美濃を中心に古代末（１１世紀後半）から中世（１５世紀）にかけて生産された釉薬のない白色の胎土を持つ日用雑器。

青磁（せいじ）・白磁（はくじ）・・・白色の胎土に淡青～淡緑色の釉薬をかけたものを青磁、透明の釉薬をかけたものを白磁という。どちらも古代から中世の大陸からの輸入品。

瓦器（がき）・・・灰白色の細かい胎土にいぶし焼きで内外面に炭素を吸着させて、焼き上げた灰黒色の日用雑器。畿内を中心に分布しており、三重県内では伊賀地方に多く分布するが、鈴鹿市域での出土はまれである。

参考文献　宮本長二郎「平城京　古代の都市計画と建築」１９８６より
イラストを引用・一部改変

メ　モ

鈴鹿市考古博物館
鈴鹿市国分町２２４番地
TEL (0593) 74-1994